ABILITY　SCHOOL　LIFE

茜雫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＡＢＩＬＩＴＹ　ＳＣＨＯＯＬ　ＬＩＦＥ

【Ｎコード】
Ｎ０８２２Ｏ

【作者名】
茜雫

【あらすじ】
１５歳の少年・朝倉　若葉は幼い頃から不思議な能力を持っていた。しかし、ある日の突然起きた事件のせいで双子の妹と能力を同時に失ってしまう。能力を取り戻すために若葉が入れられたのは…能力者専門の学校だった！？能力を取り戻すために奮闘する若葉とそんな若葉に惹かれてゆく愉快な仲間たち（？）のシリアスで多少の笑いのあるお話です。果たして無事に若葉は能力を取り戻して学校を卒業することができるのか！？

登場人物設定（前書き）

登場人物のことがよく分からない、という意見がありましたので登場人物について軽く述べておきたいと思います。

※初めての方にはネタバレになる部分もあるかもしれません。

登場人物設定

朝倉　若葉　Ａｓａｋｕｒａ　Ｗａｋａｂａ　（１５）

本編主人公。幼いときから予知能力を持っており、そのせいで双子の妹とともに親戚中をたらい回しにされた経験がある。基本は明るく能天気な男の子。しかし、時々闇の部分を見せることも。とある事件のせいで妹と能力を失ってしまい、それを取り戻すためにＡＢＩＬＩＴＹ　ＳＣＨＯＯＬに通うことになる。

朝倉　隆一　Ａｓａｋｕｒａ　Ｒｙｕｕｉｔｉ　（３６）

若葉の父方の叔父で養い親。親戚中から変人と有名だが、若葉から見ると普通の人。煙草を吹かして機嫌が悪そうにしている姿がダンディで女子高生にはモテてるらしい（笑。ちなみに多忙な職業についているらしいが若葉はそれについて一切知らない。

藤原　湊　Ｆｕｊｉｗａｒａ　Ｍｉｎａｔｏ　（１５）

若葉の友達第一号。気弱で若葉が何かしでかす毎にため息の増える苦労人。頭が良くて学年主席。頼まれると断れないタイプ。最近では若葉のとんでもない言動や行動のせいで胃薬を持ち歩いている…らしい。

松風　海斗　Ｍａｔｕｋａｚｅ　Ｋａｉｔｏ　（１７）

俺様何様生徒会長様。三年生。能力者のエリート中のエリート。しかし、荒っぽい性格で気に入らない奴は排除しようとする。入学式で居眠りをしていた若葉に目を付けた。

雨宮　きらら　Ａｍａｍｉｙａ　ｋｉｒａｒａ　（１７）

生徒会三年副会長。ウェーブのかかった亜麻色の長い髪が特徴の美少女。ふんわりとした印象を受ける優しい少女ではあるが、彼女の冷笑は人を凍りづけにすると噂される。

三浦　梓　Ｍｉｕｒａ　Ａｚｕｓａ　（１６）

生徒会二年副会長。高校二年生とは思えないほど幼児体系な少年。女子生徒からかわいいとチヤホヤされるのが日課。彼の毒舌副音声は男子生徒の耳にしか届かないという。

楠木　撫子　Ｋｕｓｕｎｏｋｉ　Ｎａｄｅｓｉｋｏ　（１５）

生徒会書記。一年生ながらもその優秀さで中学卒業後すぐに書記にスカウトされた和風美人。家は茶道の家元で常に礼儀正しい。

安西　雅之　Ａｎｎｚａｉ　Ｍａｓａｙｕｋｉ　（１７）

生徒会会計。三年生。銀縁眼鏡に鋭い目つきというインテリそうな外見を持つ少年。しかし残念なことに重度のナルシスト。自分より美しい人はこの世にいない、と思っている女子の敵（笑。

寿　灯（仮）　Ｋｏｔｏｂｕｋｉ　Ａｋａｒｉ　（１６）

生徒会庶務。二年生。外見は金髪にピンクのメッシュで制服を着飾るといったチャラ男。しかし、その中身は繊細な乙女…らしい。はっきり言うとオカマ。灯というのは偽名で本名は本編で出す予定です。

柳沢　ハルカ　Ｙａｎａｇｉｓａｗａ　Ｈａｒｕｋａ　（１５）

一年Ａ組のお姫様。というより女王様。海斗の幼馴染だが、海斗のことが大嫌い。そのため大嫌いな海斗に啖呵を切った若葉に一目惚れする。

白石　美代子　Ｓｉｒａｉｓｉ　Ｍｉｙｏｋｏ　（２６）

一年Ｃ組担任。優しく生徒思いの先生。担当は音楽系能力。生徒ともフレンドリーに話すため生徒からは大きな信頼を得ている。

登場人物設定（後書き）

新キャラや新しい設定ができた場合は付け足します。

序章　物語の始まり

毛質の柔らかい茶髪の髪に母親譲りの青い瞳。フランス人とのハーフで会った母親を持つ若葉は何も知らない人から見ればただの美少年だった。

若葉にはほぼ同時刻に生まれた二卵性双生児の妹もいた。優しい母親に頼りになる父親。家も裕福で二人は恵まれていた。

しかし、若葉は普通の人とは違っていた。

若葉には不思議な能力があったのだ。若葉は人の行動でも、明日の天気でも何でも先のことを読んでしまう力があった。

「二人とも、今日はもう終わりにしてね。明日またあそびましょう？」

「ママ、あしたはあめがふるからおそとであそべないよ」

「何いってるの？天気予報は晴れだって言ってるでしょう？」

「あしたはあめなの！！」

次の日は若葉の言ったとおりの雨だった。次々とあたる予言に両親は恐ろしくなり、とうとう若葉と双子の妹を親戚に預けてしまった。

双子はどこへ行っても気味悪がられて、親戚内をたらい回しにされ、ようやく行き着いたのは変人と有名な父方の叔父の元だった。

叔父の隆一は確かに変わった人だったが双子には優しくしてくれた。彼は多忙な人で家を何日も空けることが多かった。けれど、二人は幸せだった。

しかし、二人が十三歳になった年にその小さな幸せもとある事件のせいで突然壊れてしまった。

今まで当たり前のようにあった予知能力と当たり前のように傍にいた片割れを同時失ってしまった若葉はその明るい性格が嘘だったかのように抜け殻になってしまった。

「また、ここにいたのか」

最近は家にいることが多くなった隆一が空ろな瞳で片割れの遺体が横たわっていた部分の前に座り込む若葉に声をかける。若葉は返事を返さなかった。

「そんなところにいつまでもいたってあいつは帰ってこねぇよ」

煙草を吹かし隆一が言うが、若葉はぼーっとしているだけだ。その青い瞳から一筋の涙が落ちる。隆一はため息をついて若葉の隣に座った。

「あいつは帰ってこねぇが、お前の失った能力を取り戻すことはできる」

その言葉にようやく若葉は隆一に目を向けた。震えた唇が言葉を紡ぎだす。

「どうやって？」

たとえ両親に嫌われ、親戚からたらい回しにされた元凶であったとしても予知能力はいなくなった片割れにいつも褒められていたもので若葉になくてはならないものだった。片割れだけでなく、能力さえも失ったと知ったときの絶望は大きかった。

「町はずれに能力者の学校がある。俺も昔はそこに通っていた」
「能力者の学校？　それじゃあ隆一さんも能力者なの？」

若葉の問いに隆一は苦虫を潰したような表情を浮かべる。

「昔…はな。今はもうただの人間だ」

隆一は若葉の前に一冊のパンフレットを置く。若葉はパンフレットを手に取った。そこには大きく横文字が広がっていた。

「ＡＢＩＬＩＴＹ　ＳＣＨＯＯＬ？」
「そのまんまのネーミングセンスだが、腕は確か。一流の能力者になるための学校だ。きっとお前の能力を戻す方法もあるはずだ」

ぱらぱらと学校案内をめくる若葉に隆一は告げる。

「幸い、そこの現理事長は俺の元同級生でな。顔が利く。お前一人を入れるくらい、どうってことないだろ」

若葉はでも、と不安そうな顔をした。

「俺、本当に能力を取り戻せるのかな」

若葉を安心させるように隆一はにかっと笑った。その顔は若葉の大好きだった父親の笑顔と同じだった。

「お前なら絶対に大丈夫だ！！」

こうして、物語は始まる。

序章　物語の始まり（後書き）

はじめまして、茜雫です。
小説を投稿するのは初めてなので色々と変な部分があるかもしれませんが頑張りますのでよろしくお願いします。

一つめの話　初めての友達

「ここがＡＢＩＬＩＴＨＹ　ＳＣＨＯＯＬ…」

隆一に渡された地図どおりに訪れた町外れに佇むＡＢＩＬＩＴＨＹ　ＳＣＨＯＯＬ。若葉はその巨大な門の前で呆然と立ち尽くしていた。

「でか…」

どこの芸術家の作品だとでも言いたくなるような彫刻のような立派な門と、膨大な敷地にそびえ立つ城のような建物。門から玄関までの道のりには美しい薔薇園があって、豪華な噴水が水しぶきを上げている。

恐る恐る、若葉はその敷地に足を踏み入れた。

今日は待ちに待った入学式。

若葉もＡＢＩＬＩＴＨＹ　ＳＣＨＯＯＬの高等部に入ることになっていた。回りはほとんどが親子づれ。多忙な隆一にまさか自分の入学式のために休みを取ってくれなど言えるわけもなく、若葉は一人ぼっちでパイプ椅子に座っていた。

するど後ろから声がかかる。

「君も新入生？」

若葉が振り向くとそこにはそばかすのある赤毛の男の子が立っていた。若葉は笑顔を見せた。

「うん。外部入学生なんだけどね」

そう言うと男の子はほっとした表情を浮かべた。隣に座ってもいいかと訪ねられて若葉は愛想よくうなづく。

「僕、藤原　湊。よろしくね」
「俺は朝倉　若葉。藤原くんも外部入学生？」
「湊でいいよ。僕は中等部からここにいるんだ」

湊はそういって苦笑いする。
「でも新入生はほとんど親をつれてるでしょ。先輩に話しかけるわけにもいかないし、君が一人で座ってたから声をかけてみたの」
その言葉に若葉は納得した。確かにいくら顔見知りの友人だったとしても寮生活で滅多に家には帰れないから親との時間を邪魔するのは忍びないのだろう。若葉はパンフレットを読んだので知っていたがこの学校では基本自分より能力の高いものに話しかけてはいけないというおかしなタブーがある。
つまり、自分から二年生、三年生に話しかけることはできないというルールなのだ。
「若葉くんはどこの中学校からきたの？」
「…中学はいってないんだ。小学校も通信教育とか家庭教師だったから…」
親戚中をたらい回しにされた双子は学校へも行けなかった。やっとのことで隆一が通わせてくれた中学校も片割れがいなくなってからは不登校。ＡＢＩＬＩＴＨＹ　ＳＣＨＯＯＬに入るために二年間精神病院での生活を送っていたので実質は一年ほども通ってはいなかった。

「そうなんだ…。あ、クラスが張り出されるみたいだよ。見に行こ」

湊に手を引かれて行った先には四クラスに分かれた紙があった。普通はAクラスかDクラスから見るのだろうが、湊は真っ先にCクラスを見る。しかも、そこには見事に湊の名があった。

「やっぱり今年もCかぁ…」

湊の話によると、クラスは能力別に決まるらしい。Cクラスは平凡なクラスなのだとか。自分の名前を探そうと若葉も紙をじっと見つめる。

「あ、俺もCだ」

上の方にあった名前を指差し、若葉がそういうと湊も反応した。

「ほんとだ!!よかった」
「俺も湊と一緒でよかったよ」

二人で喜び、Ｃクラスの入学式の席に向った。

一つめの話　初めての友達（後書き）

若葉くんの初めてのお友達・湊くん登場です。
彼は気弱だけど頭がとってもいいんです。
次回は入学式です。

二つめの話　波乱の入学式

校長の号令からつまらない入学式が始まる。

新入生の名前が呼ばれて、担任紹介されて、理事長および来賓の挨拶が終わったころには若葉はすでに夢の世界に旅立っていた。隣に座っていた湊は苦笑しながら軽く若葉を揺するが、起きる気配は一向にない。

「以上をもって祝辞とさせていただきます」

来賓できていた中年男性が祝辞を読み終えて降壇する。すると校長は司会を続けた。どうやら来賓の挨拶はあの中年男性で最後だったらしい。湊は若葉を起こすのを諦めてため息をつきつつステージに目を向けた。

「以上をもちまして入学式を閉式いたします。続きまして、今年度生徒会の紹介に移ります」

その言葉に静まり返っていた会場は一気に歓声で盛り上がる。思わず湊は耳を塞いだ。生徒会といえば、成績優秀なエリートの集まりで、全校生徒からの憧れの的。三年前、中等部の入学式でも湊は痛い目を見た。こんなに煩い中、それでもすやすやと眠る若葉が羨ましくなった。

「今年度生徒会は登壇してください」

校長の声に六人の生徒がステージに上がった。彼らは一般生徒の黒い制服とは違い、白い征服を着こなしていた。その中の赤髪の背の高い少年がマイクを掴む。

「今年度生徒会会長の三年　松風　海斗だ。俺に面倒かけたらコロス」

その俺様な問題発言にも歓声があがる。海斗は満足したかのように鼻で笑うとマイクを隣の少女に渡した。少女はウェーブのかかった亜麻色の髪を腰まで伸ばした美人で周りの男子生徒の視線を釘付けにしていた。

「今年度副会長に任命されました、同じく三年の雨宮　きららです。皆さんよろしくお願いします」

にっこりと彼女が微笑んだことで何人の男子生徒が鼻血を出して倒れたことだろうか。美人はある意味で恐ろしかった。きっと彼女は怒ると怖いタイプなのであろう。

「同じく副会長の三年　三浦　梓だよぉ！！」

思いっきり幼児にしか見えない梓にかわいー、と女子生徒から声があがる。女子生徒からは人気なのだがどうやら同性の男子生徒には妬まれているらしく罵声が飛ぶ。すると梓はにっこりと笑みを浮かべた。

「お姉さんたちありがとー（ふざけんなよ、野郎共）」

その副音声は男子生徒にしか聞こえなかったらしく、ほとんどの男子生徒は青ざめていた。ちなみに少なくとも自分より年下の女子生徒にお姉さんはないのでは、と湊は思った。

「書記に選ばれました、楠木　撫子と申します」

撫子はまっすぐとした長い黒髪の持ち主でしぐさの一つ一つが優雅。まさしく大和撫子といっても過言ではなかった。次にマイクを持ったのは銀縁の眼鏡をかけたインテリそうな少年だった。眼鏡を上げるそのしぐさが彼をより知的に見せる。

「会計の安西　雅之だ。この俺の美貌に勝てる自身のある奴は名乗り出ろ」

しかし、残念なことに彼は重度のナルシストだった。その発言に流石の生徒会メンバーも全員がため息をついた。

そして最後にマイクが渡ったのは襟足の長い金髪でピンクのメッシュが入った一見チャラ男のように見える人物。彼はマイクを持つと大きく息を吸った。

「庶務に選ばれた寿　灯よ。灯ちゃんって呼んでねん」

湊は思わず椅子から転げ落ちそうになった。彼はいろんな意味でこのメンバーの中でキャラが濃かった。まさかあの容姿でオカマだなんて誰が想像できただろうか。

ようやく生徒会の紹介が終わったことに湊がほっとするといきなり海斗の怒号が響いた。生徒も保護者も教師も何事かと慌てる。

「そこで寝ている奴！いい根性だなぁ？」

寝ている奴。その言葉に湊は恐る恐る隣を見る。嫌な予感どおり、そこでは若葉が静かな寝息を立てていた。こんな中でも眠れるなんてどんな図太い神経の持ち主だろうか。

「そこのＣクラスのテメェだっ舐めた真似しやがって…」

海斗は明らかに怒りを浮かべていた。慌てて湊は若葉を起こす。今度は軽くではなく強く揺すった。

「ちょっと、若葉っ起きて！！」

揺すること約三分。ようやく若葉は目を覚ました。まだ寝たりない

のかしきりに目をこすっている。しかもまったく状況のわかってい
ない表情だ。周りの生徒からの視線も突き刺さるようでかなり痛い。

「どーかしたの、みなとぉ？」
「どうしたもこうしたもないよっ」

元々気弱な湊はもう涙目だ。若葉はそんなことも気にせずにステー
ジに目をやる。

「テメェ、覚悟はできてんだろうなぁ？」

まるで獲物を狙うライオンのような表情の海斗を若葉は無表情で見
つめた。そして一言。

「まるで猿山の大将だな」

若葉の毒舌に辺りが静かになる。湊は青ざめるを通り越して真っ白になっている。生徒会役員たちも事の成り行きを面白そうに見ていた。

「あ゛あ゛？」

凄んだ海斗に生徒や保護者、教師も青ざめる。しかし若葉は余裕の表情。

「だからわざわざ俺が起きてあんたの話きくなんて馬鹿らしいっつってんの」

海斗の顔が今までとは尋常にならないほど怒りで真っ赤になった。怒りに任せて持っていたマイクを床に叩きつける。マイクが無残に粉々になったことから相当怒っている。海斗は若葉の方を指差すと大声を上げた。

「テメェ覚悟しとけよ！！ぜってー後悔させてやるからな！！」

若葉はそれを鼻で笑った。

二つめの話　波乱の入学式（後書き）

キャラの濃い生徒会役員が出てきました。
若葉くんＶＳ俺様生徒会長です。
今回は若葉くんが寝てしまっていたので湊くんに頑張ってもらいました。
ちなみに若葉くんは低血圧で寝起きは魔王様級に最悪です。そしてそのときのことを覚醒すると覚えてないのでさらに最悪です。
果たして若葉くんはどうなっちゃうのでしょうか。

三つめの話　Cクラス（前書き）

少々嫌われ要素が入りますので苦手な方はご注意ください。

三つめの話　Cクラス

「ねぇ、湊？」

若葉が不思議そうな顔で湊を見た。対象の湊はげんなりとした顔で返事を返す。

「何…？」

「どうしてみんな俺のこと見つめてんの？」

見つめている。それは間違った表現であった。正確に言えば睨んでいる、だ。しかし、先ほどの入学式で一気に疲れきった湊はそれを説明するのもしんどかった。

そして、当の本人である若葉は数分前、自分が全校生徒の前で憧れの的の俺様生徒会長・松風　海斗に啖呵を切ったことすら覚えてないのだ。

「あ、分かった。皆、友達になりたいんだろ？友達は多い方がいいもんね」

湊は再び大きなため息をつく。どんだけ能天気なんだ、この少年は。

切実に叫びたくなった。湊は何度目かのため息をついた。

そんな湊を救うように現れたのは担任教師だった。

「はじめまして、今日からこのクラスの担任になりました。白石美代子です」

にっこりと笑顔を浮かべる女性。何人かの男子生徒は頬を赤らめる。彼女も相当な美人だ。あたりを見回して美代子はそうだ、と手を合わせる。

「自己紹介しましょうか。今年は外部の子も多いからね」

名簿順に自己紹介が始まる。新たな発見だったが、能力者のほとんどはプライドがすさまじく高いらしい。なぜか聞かれてもいないのに能力の自慢をべらべらと話し続けた。それは三番目であるはずの若葉まで二十分もかかったことから良く分かる。やっと若葉の番が来た。

「朝倉　若葉です。中学は行ってないし、今は能力も使えないけど、皆仲良くしてな」

若葉はにかっと笑う。しかし、そこには気まずい雰囲気が流れただけだった。クラスメートたちはこそこそと近くの生徒と陰口を言い始めた。

「聞いた、中学行ってないって」
「やだ、不登校？」
「そりゃぁ、あの性格じゃぁあなぁ？」
「それに能力は使えないですって」
「どうせ大した能力でもないんだろ」
「そんなんでよくこの学校来れたよな」
「裏口入学じゃねーの」

最後の発言に大きな笑い声が上がる。

「こら、やめなさい！」

美代子が注意するが、笑い声は大きくなるばかりだ。湊も俯いて気まずそうにしている。しかし、若葉はまったく気にしてはおらず、平然と言ってのける。

「まぁ、否定はできないけど。確かに裏口入学ってやつだし」

笑い声より何倍も小さい声だったがしかったその場がピタリと静かになった。

クラスメートは驚きの目で若葉を見る。美代子と湊も同じく若葉の方を見ていた。

クラス中の視線を受ける若葉に恐る恐る美代子は若葉に聞いた。

「朝倉くん、ほ、ほんとにそうなの？ 無理しなくても…」
「本当のことですよ、先生。俺の叔父さんがここの理事長らしくて」

何も気にしていないといった表情で若葉はやすやすと答えた。

その答えに唖然としていたクラスメートの一人が机を叩いて立ち上がる。

「ふざけんなよっ俺は努力してここに入学したんだっいくら能力者

でもここに入れるのは一握りなんだよ！！それを裏口入学なんかで…」

「そ…そうよ、私だって！！」

「僕だって！！」

ブーイングの嵐に美代子も何も言えなかった。

これは正論だったからだ。ここに入学できるのは一握り。努力して入ったのに目の前にいる奴はなんの苦労もせずに裏口入学だというのだ。

「なんの苦労もしてないような顔しやがって！！」

ブーイングの中で聞こえたそれに困ったように笑っていた若葉の表情が固まった。

クラスメートたちはそれに気づかない。しかし、湊は若葉の雰囲気が変わったことに気づいた。

若葉がゆっくりと口を開く。

「なんの苦労もせずに生きられる人間なんていないんだよ」

その言葉は小さすぎて誰にも届かなかった。

昼休みになると若葉の表情もいつもの明るいものに戻っていた。湊とともに食堂で昼食をとる。しかし、若葉の回りは誰もおらずこそこそとした陰口は続いたままだ。

一緒に昼食を食べている湊もおろおろとしたままだ。

そんな気まずい雰囲気の中、一人の少女が近づいてきた。かなり強気そうな少女だ。

「失礼。Ｃクラスの朝倉　若葉さんでいらっしゃいますわね」

「そうだけど…」

少女はその返事を聞くと自分の胸元に手を置いた。

「あたくし、Ａ組の柳沢　ハルカと申しますわ。ぜひ、あなたとお話したいと思ってましたの。お隣よろしくて？」

「どうぞ？」

ハルカは優雅に席についた。すると周りの男子生徒たちから歯軋り

が聞こえる。どうやら彼女も相当人気の人物らしい。

「単刀直入に言わせていただきますわ。あたくし、あの俺様男が大嫌いですの」

俺様男。その単語に会う人物は若葉の脳内でただ一人だった。生徒会長・松風　海斗だ。

ハルカはよく意味のわからないという顔をしている若葉に向き直った。

「あたくし、あの男とは幼馴染という忌まわしい関係にありますの。あなたがあの男に猿山の大将という罵声を浴びせたとき、あたくしは直感したんですわ」

「あの…どういうことですか？」

彼女の剣幕に流石の若葉も敬語になる。彼女は困惑している若葉の手を両手で握りこんだ。

突然の行為に湊も目を丸くする。

「あたくし、あなたの男らしさに恋をしましたの」

にっこりと笑みを浮かべられて若葉は固まった。

三つめの話　Cクラス（後書き）

新キャラ登場です。
お嬢様口調のハルカちゃん。というかお嬢様です。
誤字脱字、感想等ありましたらよろしくお願いします。

四つめの話　愛なんて知らない

一気に思考が停止してしまった若葉は呆然と固まる。湊も唖然と口を開けていた。

周りの生徒たちも何事だと遠巻きに若葉たちを見る。

「あら、どうなさいましたの？」

返事を返さない、いや返せない若葉の顔をハルカが覗き込む。

彼女の整った顔が視界に入った瞬間、若葉はものすごい勢いで立ち上がった。その勢いにその場にいたハルカ以外の生徒がビクッとしたぐらいだ。

ハルカは満面の笑みで若葉を見る。

「ぜひお付き合いしてくださいません？」

やっと俯いていた顔をあげた若葉はいつものような無邪気な笑みを

浮べていた。

少しだけ、その場の空気が明るくなる。

「とっても悪いんだけど、俺は君のこと良く知らない。だからさ、友達からやっていこう」

振られるときのベタな台詞。

プライドの高いハルカであれば、こんな言い方をすれば絶対に大変なことになる。

そう考えた湊があわてて弁解を始めた。

「えっと、若葉はその…「分かりました」…へ？」

湊の言葉を遮ってハルカは立ち上がる。その表情に怒りはない。むしろ清清しい表情だ。

「あたくし、諦めませんわ。あなたにあたくしの事を良く知っていただきます。この話はそれまでの保留にしときますわ。それでよろしくて？」

「え、ああ、うん」

立ち直りの早いハルカに若葉は戸惑うばかりだ。湊も一安心といった表情をする。

ハルカは若葉が急に立ち上がったことで倒れた椅子を元に戻す。

「それではあたくしは失礼しますわ。またお会いしましょう？」

ハルカがにっこりと微笑む。そしてその辺の生徒に聞こえるように少し大きめの声で続ける。

「そうそう、皆様。わかってらっしゃるとは思いますけれど、彼の敵はあたくしにとっても敵。あたくしに目をつけられたくないならば余計な真似はお控えくださいますよう」

優雅に礼をするとハルカは食堂を出て行った。呆然としていた遠巻きで見ていた人ごみもその様子を見て慌てて活動を再開する。

ただ、ハルカの力なのか陰口を叩くものはいなかった。

先ほどまでべらべらと何かを話していた若葉はハルカがいなくなってからは一言も話さなかった。

食堂を出て、流石に心配になってきた港が若葉に声をかける。

「若葉、大丈夫？どうかしたの？」

俯いていた顔を若葉があげた。

それはクラスで見せた無表情。

湊はそれに驚いて肩を叩こうと伸ばした手を引っ込めた。

無表情だった若葉の顔が泣き出しそうに歪む。苦しげなその表情に湊は息を呑んだ。

「若葉…？」

「分からない、分からないんだ。好きってなんだよ」

こみ上げたものを吐き出すように若葉がそう言った。

「そんなもの、知らない。母さんと父さんでさえ俺を愛してなんてくれなかった‼」

今までたまったいたものがすべて表に出される。原因はハルカのことらしい。

そうえばあのときから様子がおかしかったと湊はふと思い出した。

明るい若葉の闇を初めて感じた湊はどうすればいいのか分からなかった。

普通の子供に生まれたかった。

それはずっと若葉が思ってきたことだった。

自分の力に気づいたときからずっとずっと。両親に愛されていないことを感じていた。

「パパぁ、あれ買って！！」

「はは、仕方ないなぁ」

「もう、あなたったらこの子に甘いんだから」

街中に遊びに行くと必ず見る三人家族。

幸せに笑っている普通の家庭。

どこにでもいるはずのその家族が若葉はうらやましくてしょうがなかった。

両親が若葉たちを親戚に預ける前日、若葉はこっそりと二人の会話を聞いてしまった。

「あなた…あの子たちを親戚に預けましょう？私、もう耐えられないわ。あの子が恐ろしくてたまらないの」
「それなら若葉だけでいいじゃないか。なぜ二人同時に…」
「あの子たちは双子よ。あの力を持ってるのは若葉だけじゃないかもしれないじゃない！」

若葉は心の中で何度も、片割れに謝った。
自分が生まれてきたせいで、あの子もつらい思いをしなくちゃならなくなってしまった。
若葉は蹲って静かに涙を零した。

「役立たずな子供たちだねぇ」
「まったくだわ」

どこに行っても二人は邪魔者扱いを受けた。
主に怒られるのは若葉ではなく双子の片割れ。器用な若葉とは反対に不器用な彼女はいつも怒鳴られてばかりだった。
泣き虫の彼女を慰めるために若葉は笑う。たとえ、悲しくても悔しくても。
あの子がいてくれれば何もいらなかった。それだけだった。

「俺には……綾葉（あやは）だけだったのに」

今だけ、あの子を思い出すことをお許しください。

四つめの話　愛なんて知らない（後書き）

シリアスです。
両親にも愛情をもらえなかった若葉くんは告げられた感情に戸惑いを隠せません。
そして今回でました。
若葉の双子の妹・綾葉ちゃんです。
若葉くんが笑うのは綾葉ちゃんのためなんです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0822o/

ABILITY　SCHOOL　LIFE

2010年10月9日06時41分発行